

[研究ノート]

組織論で読み解く

江戸時代 (11)

遠田雄志 / 小川 格*

目次

はじめに

I. 組織としての江戸時代

1. 組織の常識

- 1.1 鎖国
- 1.2 米本位制
- 1.3 参勤交代
- 1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)

2. 成長ゆえの衰退

- 2.1 武士が武器を独占した社会
- 2.2 家康を支えた譜代家臣団
- 2.3 徳川幕府の金、物、人
- 2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折
(以上第47巻1号)

3. 変化の気づきと互解

- 3.1 海外事情
- 3.2 田沼意次
- 3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)

4. 常識の更新

組織の適応モデル

- 4.1 尊皇攘夷
- 4.2 志士という名のアジテーター
- 4.3 適塾と蘭学の行方
- 4.4 幕末そして維新のあけぼの
(以上47巻3号)

II. 江戸時代の春夏秋冬

組織の適応過程

1. 春

- 1.1 最後の戦争
- 1.2 改易と浪人の激増 (以上47巻4号)
- 1.3 将軍と天皇
- 1.4 鎖国への道のり (以上48巻1号)

2. 夏

2.1 元禄時代

- 2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令
- 2.3 赤穂浪士の忠義
- 2.4 芭蕉を生んだ元禄時代

(以上48巻2号)

3. 秋

- 3.1 常識の再検討
- 3.2 吉宗と田沼の政治手法
- 3.3 定信の目指したもの
- 3.4 本居宣長と国学の発展

(以上48巻3号)

4. 冬

- 4.1 大江戸ワンダーランド
- 4.2 鎖国から開国へ (以上49巻1号)

III. 江戸時代の意味するもの

1. 江戸時代と常識

1.1 鎖国と江戸時代

- 1.1.1 春：鎖国の確立
- 1.1.2 夏：鎖国体制の安定期
- 1.1.3 秋：揺らぐ鎖国の常識
- 1.1.4 冬：崩壊する鎖国の常識
鎖国はなかったか (以上50巻1号)

1.2 参勤交代と江戸時代

参勤交代の果たした役割

- 1.2.1 春：参勤交代の成立
- 1.2.2 夏：参勤交代の強化発展
- 1.2.3 秋：参勤交代の修正
- 1.2.4 冬：参勤交代の終焉 (以上本号)

1.3 米本位制と江戸時代

1.4 身分制と江戸時代

2. 江戸時代の盛衰

おわりに

*編集事務所南風舎顧問

1. 2 参勤交代と江戸時代

江戸時代には他の多くの国々の常識から見て、極めて特殊な習慣、風習、行動様式などがある。衣食住をめぐるあらゆる行動様式が世界のなかで極めて特殊な型を作り上げていた。ちょんまげとか二本差しなどのように近代化とともに失われたものもあるが、寿司やキモノなど今日まで行われて、いまだに世界の注目をあつめているものも数多い。浮世絵は廃れたが、歌舞伎や相撲は今なお健在である。生活に密着した文化は色濃く残っていると見える。

これらのユニークな風習は、長い鎖国の中で、他国からの影響を遮断して、海にとざされた日本列島のなかで熟成し、特殊な発達を遂げた結果であることは疑問の余地がない。

ここでとりあげる参勤交代もそうしたきわめてユニークな制度の一つである。中央の権力つまり幕府が地方に分散した権力機構のサブシステムである藩をコントロールするために練り上げられたきわめて巧妙な仕組みである。武力を振りかざした露骨な支配・服従関係を隠蔽して、洗練されたヴィジュアルな儀式に仕立て上げたものということもできる。その中の中心的な要素が大名行列であり、本質は武装した武士たちの行軍であるにもかかわらず、庶民の目を意識して祝祭的な要素を組み込んで、市民に楽しを提供するものにまで変化、発展したものである。その典型が長い毛槍を投げ合うおどけた奴たちのパフォーマンスである。その動作は今日の路上のパフォーマンス、ジャグリングそっくりだ。視覚化された支配のシステムと云ってもよいだろう。

以下のよく知られている手まり唄は紀州藩の大名行列を題材にしたものだ。

「稔と殿さま」(作詞 西条八十・作曲 中山晋平) (1929 (昭和4)年)

一
てんでてんまり てんでまり
てんでてんまりの 手がそれて
どこから どこまでとんでった
垣根をこえて 屋根こえて
おもての通りへ とんでった とんでった
二

おもての行列 なんじゃいな
紀州の殿さま お国入り
金紋 先箱 供ぞろい
お駕籠のそばには ひげやっこ
毛槍をふりふり ヤッコラサのヤッコラサ

これは、庶民の子どもにまで親しまれた童謡であるが、ここには庶民がとらえた大名行列の視覚的なイメージがきわめて的確に描かれている。言い方をかえれば、庶民は参勤交代をこのようなものとして捉えていたのであり、大名とはこのような華麗な存在であると考えられていた。

この童謡ができたのは1929 (昭和4)年、明治維新から61年たって、大名行列を見た老人も生存していたはずだし、まだ大名行列のイメージはリアルに残っていたことを推測させる。

そうして維持した統治システムとしての幕藩体制は明治維新とともに崩壊し、跡形もなく消失してしまった。幕府と全国266の藩、その武士、大名、すべてが姿を消した。参勤交代もなくなり、大名行列もなくなった。

つまり、参勤交代は江戸時代という特殊な時代と固く結びついた固有の制度であり、江戸時代の終焉とともに消滅した。逆に言うと参勤交代が終焉したために江戸時代が終わったともいえる。参勤交代はそれほど江戸時代の徳川幕藩体制の存立と深く関わっていたのである。

われわれの主題に即して言えば、参勤交代は常識として江戸時代という組織を支えていたのである。

参勤交代の果たした役割

交通網の整備

幕藩体制、つまり、幕府が全国の諸藩を支配するために作り上げたもっとも分かりやすい方法が参勤交代であったが、この制度により全国の名前は2年に一度、藩士を引き連れて江戸へ行き、将軍に挨拶しなければならなかった。大名行列については藩士の数や装備は幕府から指定されており、勝手に変更することはできなかった。なかでも目につく毛槍、十文字槍、挟箱など藩の格式を示す道具類の数や配置は特に厳しく決められていた。

また、大名は妻子を江戸へ送り出し、人質として住まわせなければならなかった。そのため、幕府は各藩に江戸屋敷を提供した。

全国二百数十の藩が全国各地から江戸へと行列をつくって行進する、そのためには、まず、道路が必要であった。全国の主要な街道はこのために整備された。東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道の五街道をはじめとして、全国の主要な道路がこうして整備された。また、街道の整備のために幕府は道中奉行をおき、街道の付け替え、拡幅、人足や馬の賃銭の決定、並木の管理などを司った。また、何日もかかる大名行列のために、街道には宿泊設備も必要であった。東海道五十三次をはじめ、各街道には宿場が作られた。宿場には大名の泊まる本陣のほか、藩士などの泊まる旅籠（はたご）、木賃宿などがあり、宿泊のための宿とともに食事が供された。

東海道を例にとるなら、一つの宿場には本陣のほか小さい宿場でも15軒、大きい宿場では250軒ほどの旅籠があり、東海道全体では3,000軒ほどの旅籠があった。さらに、宿場を中心として街が形成され宿場街として繁栄した。こうして参勤交代のために日本中の交通網が整備されたわけだが、その効果は政治的にも、経済的にも、文化的にも非常に大きなものがあった。

本質的には地方割拠の封建社会にもかかわらず中央集権体制を維持しえたきわめて日本的な仕組みが参勤交代だったのである。

情報の交流

大名行列の行き来は単に人が行き来しただけではない。行列を支えるために大量の食料、衣類、武器など膨大な資材が必要であった。しかし、もっとも重要なものは情報であった。参勤交代によって江戸の最新の情報が地方へ伝わり、地方の情報も江戸へと伝えられた。

情報の中身はなによりも自分の藩の浮沈に関わる政治的な情報から、経済、文化まで多様であった。随行した藩士にとっては江戸の流行が何よりも気になった。そうした文化は彼らによって、瓦版、絵双紙、泥絵、浮世絵などを使って全国へと伝わっていった。

江戸には全国の藩から武士たちが集まっているため、相互の情報交換もさかんに行われた。大名は江戸へ着くと将軍に挨拶するほか、老中など主な人々への挨拶とプレゼントも欠かせないが、さらに友好的な藩同士も挨拶を交わしあったほか、正月など季節の挨拶のため訪問しあうなど、江戸では藩同士の交流は自由にできた。国元では隣の藩との交流は禁じられていたから、参勤交代がなければ、これほど密度の高い情報交換はできなかつたに違いない。全国的情勢が江戸で把握できたのである。

類いまれな江戸文化も、こうした密度の高い情報交流の上に花開いたものであった。

江戸日本橋に松尾芭蕉が住んでいることは、俳句に興味のあるものなら全国的に知られており、彦根藩士の森川許六は参勤交代を利用して、江戸滞在中に芭蕉に入門を果たしている。かれは後に彦根における蕉門を代表する門人として活躍することになる。また、芭蕉が旅にできれば、行く先々で門人たちが待ち構えていた。「のざらし紀行」では、名古屋周辺の俳句の好きな豊かな商人たちが芭蕉を歓待し句会を繰り返して長い逗留を楽しんでいた。

江戸後期の画壇で繊細な植物の描写でひときわ異彩を放っているのが最後の琳派といわれる酒井抱一（ほういつ）であるが、彼は神田小川町の姫路藩邸で藩主酒井忠仰（ただもち）の次男として生まれ育っている。そのため江戸の文人や画家の中で自由に才能を磨くことができた。姫路藩主の子息でありながら、参勤交代にともなう江戸居住の立場を活かして、江戸で才能を開花させた例である。

土佐の髪結職人の子どもであった弘瀬洞意（とうい）は小性として参勤交代に随行し、江戸へ着くと、狩野派の絵師洞益（とうえき）に3年間師事し、帰国後、癖の強い芝居絵を得意とする絵金（えきん）として名を馳せる画家となった。

江戸も後半に入ると江戸には全国の有力な学者や武道家が塾を開いており、ここには全国の野心的な若者が集まった。しかし、個人的に藩を出て江戸へ向かうことはできなかつたので、佐久間象山の塾とか、千葉周作の剣道場と

か、全国から若者が目指すためには、参勤交代の機会を利用したケースが多かったと思われる。若い向上心に富んだ藩士は参勤交代の要員に選ばれることを熱望した。

薩摩の西郷隆盛はペリー来航の翌年、島津斉彬(なりあきら)に随行して江戸へ登っている。この江戸滞在中に水戸の論客藤田東湖、福井の橋本左内らと会い、議論を重ねるなかで、薩摩を代表する志士として名を馳せることになる。

長州藩の吉田松陰も20歳で参勤交代の藩主に随行して江戸に向かう。嘉永4年ペリーが来航する2年前であった。江戸では、儒者安積良斎(あさかごんさい)や古賀謹一郎をはじめ名のある師を求めて端から門をたたいたが、満足できず、ついに佐久間象山に出会って心服する。さらに脱藩して東北に向かうが、その途次、水戸で会澤正志済(あいざわせいしさい)に会い、尊王思想にふれる。こうして吉田松陰は参勤交代によって江戸に入り、志士として開眼するのである。

このように薩摩や長州、土佐の志士たちは参勤交代に随行して江戸で最新の情報や思想に接し、相互に交流し切磋琢磨しているのである。

その際注目したいのは、彼らが江戸で止宿していたのが各藩の江戸藩邸だということである。藩邸は、もともと参勤交代で江戸へ登ってきた各藩の大名たちのために幕府が与えたものであった。しかし、藩邸は、治外法権を有しており幕府といえどもなかなか手をだせなかった。幕末ともなると、その藩邸が皮肉にも志士たちの密議の場となるのであった。

もっとも、普通の藩士が江戸でしていたことは、それほど高尚なことではない。寺社の参詣なかでも浅草寺、増上寺、四十七士の墓のある泉岳寺は特に人気があったが、その他名所の見物のほか、吉原を冷やかしたり、川端の怪しげな小屋を覗いたり、三味線の師匠に弟子入りしたり、お土産を買ったりがせいぜいであった。

参勤交代は、江戸時代の日本が驚くほど情報・物資の交流が盛んであった理由の一つであった。こうして江戸の情報は遠隔地でもよく知られていた。

もっとも、これは幕府が意図したことではな

く、参勤交代の制度がもたらした意図せざる結果というべきものである。

要するに幕藩体制を一つの生命体になぞらえるなら、街道は血管、大名行列は血液に例えることができ、血液が動物の全身をめぐるように、情報が全国をめぐるって、日本全体で情報を共有する有機的な組織にする役割を果たしていたのが参勤交代だったのである。

これまで参勤交代が江戸時代の幕藩体制の維持に重要な働きをしていたことを論じてきたが、こうした働きが江戸時代を通じて普遍的に一樣に機能していたというわけではない。

参勤交代は、ほぼ江戸時代の全期間を通して機能したとはいえ、江戸時代の初期と中期、後期ではその規模も変化し、その機能も変わり、その果たした役割も変化していった。

例えば、仙台藩の場合、1675(延宝3)年伊達綱村の初めてのお国入りのときの大名行列の人数は3480人であったが、167年後の1842(天保13)年、伊達慶邦(よしくに)のときには1577人と半減している。

薩摩藩の場合、1635(寛永12)年の行列は1240人に対し、130年後の1765(明和2)年には507人であった。

一般的に、初期には競って規模を大きく華美にする傾向があったが、後期には規模を著しく縮小したり、その時期を遅延したり、武士を減らして臨時雇用の人足で間に合わせる傾向があった。

このように参勤交代のあり様は江戸時代の時の流れと密接な関係があった。

そこで、次に参勤交代を江戸時代の春、夏、秋、冬に沿ってよりくわしく検討してみよう。

1. 2. 1 春：参勤交代の成立

参勤交代が成立したのは1635(寛永12)年の三代将軍家光による「武家諸法度」だとされている。そこには「大名、小名在江戸交替相定ル所也」と書かれ、参勤交代はこのとき初めて成文化された。しかし、この時突然参勤交代が始まったわけではない。

強い武将に対して恭順を誓う、配下として従うことを約束することによって、安全の保証を得る。これは、戦国時代を通していたる所で行われた弱者による強者に対する服従の儀式である。これが、織田信長、羽柴秀吉、徳川家康と天下の支配者が確定してゆく過程で、唯一の権力者に向かって、全国の武将が臣従を誓う段階に至ったことが重要である。

その画期となるのが家康が秀吉の元に参じた天正14(1586)年の出来事である。天下をほぼ掌中にした秀吉は最後に残る最強の武将家康を服属させる必要があった。家康が上洛し、秀吉に平伏する姿を諸侯の目の前で見せようとするのである。しかし、いくらうながしても老かいな家康は動かない。そこで、秀吉は妹の旭姫を無理矢理離別させて家康の正室に送りこんだ。それでも上洛しないので、最後の手段として74歳になる母親を人質として送りつけた。そこまでして、やっと家康は秀吉を訪ねた。こうして大坂城表座敷で多くの大名が見守るなか、上段の間に座る秀吉に平伏して臣従を誓った。秀吉にとっては全国制覇を宣言するには、こうした儀式がぜひとも必要だったのである。

この体験は家康にとって強く胸に刻み込まれ、後の参勤交代の形式へと受け継がれたにちがない。

秀吉の死後、関ヶ原の合戦を通して、いよいよ徳川家康が全国で最強の武将であることが公認の事実となり、徳川幕府が成立すると、全国の武将が次々と家康のもとに恭順を誓って挨拶にくる。また、挨拶だけにとどまらず、さらに強い服従を示すために身内を人質として差し出す。その最初の画期的なケースが徳川にとってもっとも手強い最大の外様大名である加賀百万石、前田利長が母親の芳春院を江戸へ人質として差し出したことであった。それは関ヶ原の合戦の3ヶ月前のことであった。徳川方への協力を約束する明確な意思表示であった。

関ヶ原の合戦で徳川の全国支配が確定すると、まず伊達政宗が長子秀宗を、さらに肥後人吉(ひとよし)城主相良長毎は母親をさしだした。慶長10年には藤堂高虎が妻松寿院と子高次を、さらに家老の子4人を送った。これは諸

侯の家老の妻子まで江戸へ送る先例となった。そうすると全国の武将が右へ做えと次々に挨拶に参じ、さらに人質を差し出すことになった。

これに対し幕府は江戸に屋敷を与え、各藩は江戸に競って豪壮な武家屋敷をかまえた。屋敷は通常、上屋敷、中屋敷、下屋敷の三種からなるが、それぞれ広大な敷地を拝領した。加賀藩の上屋敷が現在の東京大学であり、水戸藩の上屋敷が後楽園の日本庭園と東京ドーム、遊園地であるからいかに広大な屋敷を構えていたか想像を絶するものがある。全国の大名が江戸に構えていた屋敷は1千に達した。江戸は火事が多かったから、中心部のみならず郊外にも多くの屋敷を必要としていたのである。

興味深いのは、徳川幕府は決して強制したり脅かしたりして参勤を強要したのではない。全国の大名が天下の形勢をうかがって自主的に始めたのが実情である。もっとも、幕府は、恭順を誓わない大名に対して、取り潰し、転封、減封を容赦なく行ったから、自主的といっても間接的な脅迫に怯えて先回りして参勤したことは間違いない。また、家康が將軍を秀忠に譲って駿府へ移ると、大名たちは江戸の將軍秀忠とともに駿府の家康のもとへも参勤した。こうして自主的に始まった参勤だが、次第に形式が整って、ついに武家諸法度として定まったのが三代將軍家光のとき1635年というわけである。

外様大名の江戸参勤はこのように確定していったが、1642(寛永19)年になると、家光は、本来身内であるはずの譜代大名の妻子を江戸へ移すよう「江戸置邸妻子収容の法」を発令した。それまでは外様大名だけに課せられていた参勤交代が譜代大名にも命ぜられたのである。こうして参勤交代の形式が最終的に完成した。

これを確実なものとするため、箱根、碓氷峠などの関所では「入り鉄砲、出女」を取り締まったが、これは人質である大名の妻子の逃亡を防ぐことが主な目的だった。

この過程を徳川幕藩体制の歴史の中で見ると、徳川幕府の興隆期、家康、秀忠、家光の時代、つまり江戸時代の春の季節に参勤交代が次第に形を整え、制度として成立したことが分かる。幕府が成立して参勤交代が次第に形式を整

える過程こそ幕府の力が強大になる過程と完全に平行していたのである。逆にみると幕府の圧倒的な力を背景としてはじめて参勤交代は形を整え制度が出来上がったのである。

こうして参勤交代は確立し、江戸時代の権力機構の中核として不可欠のものとなっていった。参勤交代は常識として定着したのである。

1. 2. 2 夏：参勤交代の強化発展

いったん成立した参勤交代は大名が自藩の強大さを誇示して、競って華美に、大規模になる傾向があり、幕府はたびたび抑制しようとしたが効果がなかった。事実、大名行列の規模と装備は藩の石高によって厳格に決められていたが、とにかくそれを超えたものになる傾向があった。

大名行列のなかでもっとも目につくのは、手まり唄にあったように金紋付きの挟箱（はさみばこ）と毛槍である。

挟箱は衣類を入れる箱であるが、ここに金箔で家紋を入れ豪華にしあげた。これを二枚の板で挟み担いだものである。藩主の前を進むのを先箱、後から行くのを後箱という。二個で一對になって進む。先箱と後箱の対を持つ大名は御三家と加賀、福井など16家に限られていた。

藩主の前に立てられた槍はもっとも目につくものであり、槍の長さ、鞘の毛皮の形、種類、色などによってどの家のものか見分けることができた。2本1対の鎗を立てることができるのは格の高い家柄にかぎられていた。

また、馬の背におく鞍覆いも奇麗に飾り立てたが、虎の鞍覆いは御三家、御家門、国持大名の30数家に限られていた。

手まり唄の金紋先箱供揃いは御三家の一つ紀州藩の豪華絢爛の様子を題材にしたものである。大名行列はこうした持ち物で家格が表現されたため、各藩は競って幕府に願い出て華美を競った。

大名行列の人数は藩の石高によってだいたいの数が決められていた。

加賀藩が最大規模の参勤交代を行ったのは、第5代藩主綱紀（つなのり）のとき正に元禄時代であった。このころ大名行列に参加した人数

は4,000人に達したと云われている。いずれの藩もこのころ最大の規模に達していた。

こうして定着した参勤交代の結果、江戸は全国から来た武士たちであふれた。かれらの生活を支えるため、江戸はあらゆる商工業が発展し、空前の活況を呈した。こうして江戸は世界に例を見ない大都市になった。

これは、一度決まった常識が自動運動を始められることを示す分かりやすい事例である。

1. 2. 3 秋：参勤交代の修正

第8代将軍吉宗が将軍職に就いた頃、幕府の金庫は底をついていた。幕府は旗本への給料の支払いにも窮していたのである。吉宗は参勤交代が諸大名の大きな負担になっていることを考え、3年か5年に一度参勤すればいいのではないかと、側近に相談した。聞かれた室鳩巢などの側近は、そんな重要なことを軽々しく修正していいのかわからずうろたえるばかりであった。

結局、吉宗は天下の諸侯を4つに分け、半年は江戸、1年半は在国とする。つまり江戸在住期間を1年から半年へ大幅に緩和したのである。

そのかわりに一万石に米百石を上納することを全国の大名に要請した。いわゆる上米（あげまい）の制である。

1722年、この制度の修正により、制度創設以来87年ぶりに参勤交代は初めて大きな修正が加えられたのである。これは大名から歓迎されたのはもちろん、幕府財政の改善にも大きな貢献をした。しかし、幕府存立の基本に関わる重要な問題として心配する向きも多く、幕府の金庫も余裕ができたため、8年後には廃止され、参勤交代はもとの形に復帰した。

江戸の中期から後期にさしかかるとき、季節としては秋に入ったときであった。江戸幕府の財政が破綻し、体制にひびが入った。このとき、参勤交代に変更が加えられた。この時代になると、将軍は参勤交代をそれほど重要とは考えていなかったようだ。

参勤交代の制度はもとに戻ったものの、各藩は次第に経済的に困窮してゆき、参勤交代を維持することが困難になっていった。そのため、規模を縮小したり、出発を遅らせて幕府から注

意されるなどの支障がではじめた。

出羽庄内藩の酒井家は譜代の名門であるが、祖父の代に、老中を勤めたため多額の出費で藩の財政が圧迫され、多額の借金を背負って、財政は著しく困難になっていた。1772年16歳になった酒井忠徳(ただあり)は第7代藩主になって初めてのお国入りをを行うことになった。江戸に生まれて江戸に育った殿様が初めて自国へと旅立つ晴れがましい大名行列である。

しかし、財政が苦しい酒井家の江戸藩邸では必要な旅費を工面することができなかった。そこで不足分は途中で国元から持参させることにして、とりあえず江戸を出立した。ところが、福島まで来て旅費がとうとう尽きてしまった。しかし、国元からはまだ旅費が届かない。やむなく係の役人が忠徳に実情を述べ、しばらく福島に滞在するしかありませんと申し上げると、忠徳は、譜代の名門、酒井家とあろうものがなんと不甲斐ないことだと涙を流した。

この頃になると、各藩とも財政に苦しみ参勤交代の費用を捻出するのに苦労した。参勤交代の費用が藩財政に占める割合は大きく、参勤交代の費用を捻出できなかったのは、庄内藩だけではなかった。

仙台62万石7代藩主伊達重村は帰国の際に日光道中の千住宿で旅費が尽きてしまった。千住といえば江戸を出たばかりであるが、ここから先は野宿となり、食料は自給自足とし、野鳥を捕って食料とした。外様大名のなかでも加賀藩につぐ大藩の仙台藩でさえこのような悲惨な状況だった。あとは推して知るべしである。

参勤交代が幕府によって修正されたり、藩が困窮のため正常に参勤できなくなるなど、参勤交代制度そのものが揺らぎ始めたのである。それとともに幕府の力も弱体化し、たび重なる改革を行わざるを得なくなったが、立て直しは困難を極めた。

1. 2. 4 冬：参勤交代の終焉

1862年、薩摩藩主島津久光は家老小松帯刀、側役大久保一蔵らを含む1,000人ほどの兵を率いて京都へ向けて出発した。強力な武力を背景にし、さらに朝廷の権威を借りて幕府に改革を

迫ろうとした。それが卒兵上洛である。幕府の許可なく薩摩から京都まで大軍を移動したのだ。朝廷は久光の勢いに押されて、勅使の江戸派遣に同意し、大原重徳(しげとみ)を派遣することにした。久光は朝廷を巻き込んで勅使の護衛という名目を獲得したわけである。しかし、あくまでも幕府の許可なく東海道を江戸へと行軍するのである。まったく異例の大名行列であった。参勤交代の形式をとりながら、武力を背景に幕府に改革を迫る、反乱にきわめて近似した軍事行動だ。幕府権力が強かったら絶対にあり得ない異常な事態であった。

久光は江戸につくと繰り返し登城して圧力をかけ、その圧力に老中を中心とする幕府は屈した。その結果、幕政改革が断行され、老中に匹敵する「将軍後見職」が新設され水戸の一橋慶喜が就任し、「政事総裁職」に福井藩主の松平慶永(よしなが)、「京都守護職」に会津の松平容保(かたもり)が就いた。こうして、徳川慶喜と松平慶永が中心になって幕府の改革が断行された。この流れのなかで、1862年、参勤交代の大幅な改革が行われた。

将軍と老中を中心とした幕府権力が諸藩の力に屈したのである。これはクーデタといっても過言ではない。

しかも久光の軍は、帰りの行軍中に神奈川近辺の生麦で英国人とすれ違いざまにトラブルとなり、英国人を切り捨ててしまう、いわゆる生麦事件を引き起こした。これに対するイギリスの強硬な賠償要求に屈して、(薩摩藩ではなく)幕府は巨額の賠償金を支払わされたのである。幕府は薩摩に振り回されていたわけだ。

参勤交代の改革の要旨は、在府の時期によって諸大名を4つのグループにわけ、3年に一度の参勤にするというものであった。さらに在府の期間を最大百日までとし、妻子、嫡子の居所は自由とした。

以前から、福井藩の松平慶永は沿岸防備などのために、各藩の財政は圧迫されており、参勤交代の緩和が必要と幕閣に提言していたが、ついに大幅な緩和が実現したのである。しかし、その内容は参勤交代の緩和というより骨抜きというべきものであった。

この結果、各藩の妻子をはじめ、付き人たちは、続々と故郷の藩を目指して帰りはじめ、江戸の大名屋敷はからっぽになり、雇われていた足軽、中間（ちゅうげん）などが失業し、その結果、江戸は急速に人口が減少し、江戸は火が消えたように景気が悪化し、幕府の権威は失墜した。

1864年、薩摩と会津が手を握った結果、禁門の変で長州が敗北し、長州藩追討の朝令が下る。これを機に幕府は参勤交代を元に戻し、大名の妻子を江戸に戻すよう発令したが、すでに帰国していた大名を始め妻子の江戸居住など回復することはできず、幕府の権威はますます失われていった。

失墜した権威を回復するため将軍家茂（いえもち）は上洛を決意する。将軍の上洛は230年ぶりである。すると幕府首脳をはじめ幕臣たちも京都へ移動した。政治の中心は江戸から京都へ移ってしまったのである。こうなると諸大名は江戸へ参勤交代に行く意味がなくなってしまった。

翌年、幕府は再度の長州征伐を発令したが、各地で敗北し、ついに将軍家茂が大坂城で死去し、長州藩との戦いは幕府軍の敗北に終わった。翌年、第15代将軍徳川慶喜は大政奉還を申し出、これによって、幕府による政治は終焉を迎え、参勤交代も完全に終了したのである。

明治4年（1871年）廃藩置県により、全国の藩は消滅し、260年間江戸時代という歴史を鮮やかに彩った大名は姿を消した。

幕府の権威の失墜とともに、参勤交代は崩壊していったことがわかる。また逆に参勤交代が崩壊するとともに幕府の権威は失墜し、ついには幕府も崩壊してしまったのである。

他方、参勤交代を利用して全国の諸藩から有為の若者が江戸に集まり、情報を交換しあい、志士たちが育っていった。また、参勤交代の形式を隠れ蓑にして事実上の軍事行動で幕府に改革を迫り、参勤交代を骨抜きにしてしまった卒兵上洛があった。

このころは、参勤交代が幕府打倒の手段として利用されたのである。参勤交代は幕府の初期にはその強化のために働き、後期にはその弱体

化、骨抜きのために働いたといえる。

この問題をさらに検討するなら、参勤交代の大名行列の本質に迫ることになる。本来、参勤交代は、大名が将軍に挨拶しにゆけばよいことであり、武士が同行するとしても、せいぜい大名の身辺警護のために必要な少数でよいはずなのに、それをなぜか江戸警護のためとして、大名行列が大軍の軍事行動となってしまった。幕府が強力なうちは、多数の外様の武士たちに江戸警護をさせても問題なかったが、幕府が弱体化してくると、大きな軍隊をもつ雄藩は逆に幕府に圧力をかけるという本末転倒の事態がおこった。幕府の強化のために作られた制度が幕府の弱体化に利用されたのである。大軍の移動は大きな危険をはらんだ諸刃の剣だったのである。

以上、江戸時代の常識の一つである参勤交代を江戸時代の盛衰の流れの中で少しばかり検討してみた。その結果、前稿での鎖国の検討と同様、参勤交代も当初、幕藩体制の隆盛に大いに寄与したがやがて衰退の要因と化してしまうことが明らかになった。

ところで、参勤交代には、江戸時代のほかの3つの常識、鎖国、米本位制、世襲・身分制ではうかがい難いユニークな特性がある。最後に、それについて簡単に述べてみよう。

組織は、一般にその成長局面では求心力が強まり、衰退局面では求心力が弱まる。1964年の東京オリンピックに比べ2020年のオリンピック招致熱が低いのはその一例である（詳しくは、遠田雄志「成長－衰退理論」『経営志林』第50巻第1号、2013年4月、を参照されたい）。

実は、参勤交代は、幕藩体制の求心力を測る格好の物差し、ビジュアル・インデックスなのである。参勤交代が各藩の幕府に対する恭順の意を表すパフォーマンスであることを思えば、それは当然のことである。なるほど、江戸時代の春、夏においては、各藩は競って勢を誇示し贅を極めた参勤交代に腐心した。対する江戸時代の秋、冬においては、少なからぬ藩が参勤交代に手を抜き、全体に参勤交代が蔑にされるようになった。

徳川幕藩体制の求心力を直截に示す参勤交

代がかくも様変わりしてしまったことから、江戸時代の終焉が間近に迫っていたのがわかる。

〔参考文献〕

- 安藤優一郎 (2010) 『大名行列の秘密』 NHK 出版
コンスタンチン・ヴァポリス (2010) 『日本人と参勤交代』 柏書房
忠田敏男 (1993) 『参勤交代道中記』 平凡社
永井 博 (2012) 『参勤交代と大名行列』 洋泉社
根岸茂夫 (2009) 『大名行列を解剖する』 吉川弘文館
山本博文 (1998) 『参勤交代』 講談社現代新書

